

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32305

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01660

研究課題名（和文）外国人児童の幼児期の言語習得と幼小接続を促す評価方法及び教育実践プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an assessment and education program for foreign children in Japan to promote language acquisition and smooth the transition from ECE to elementary school education

研究代表者

岡本 拓子 (Okamoto, Hiroko)

高崎健康福祉大学・人間発達学部・教授

研究者番号：80309442

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では日本に暮らす外国人児童を対象に、あらゆる学習の基礎となる言語力を幼児期から育成すること、また小学校以降の学習へと円滑に繋ぐために、外国人児童のための幼小接続における円滑な言語教育実践プログラムを開発することを目的とした。まず、外国人家庭と児童が直面する課題を明らかにし、次に諸外国及び日本の多文化保育の先進的な実践を参考に、幼児期において保育者が日常生活の中で子どもの言語習得状況を把握し指導にいかすための指標を作成した。最後に、これらを基に小学校以降の学習へと繋げるための言語教育実践プログラムの開発に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、外国人児童が直面する言語習得における課題に着目し、その不十分さがとくに小学校以降の学習に大きな影響を及ぼすことを明らかにし、その課題を克服するための方法として、幼児期において保育者が子どもの言語習得状況を把握し小学校以降の学習に繋げるための評価指標の試行版を作成した。また、多文化共生において先駆的な取り組みを行っている福井県越前市の多文化保育・教育の実践についてその意義を明らかにすることができた。

これらの研究成果によって、今後益々増加する外国人児童に対する具体的な言語教育の方法や多文化共生保育・教育のあり方を示すことができた点に学術的意義・社会的意義があると考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a practical language education program for non-native Japanese speaking children living in Japan to improve language skills as a foundation for learning and facilitate a smooth transition from early childhood education to elementary school education.

First, the problems faced by non-native Japanese-speaking parents and children were revealed. In addition, through observations of ECE and elementary school in multicultural settings in Europe and Japan, it was suggested that providing continuous instruction according to each child's second language skills, creating a comfortable environment for children to speak their native language, and providing support to parents in their native language were important. Finally, based on these findings, we developed a scale for ECE teachers to assess non-native Japanese children's language abilities so that ECE teachers would be able to share the children's development with elementary school teachers.

研究分野：子ども学

キーワード：外国人児童 幼小接続 日本語教育 言語習得 指導と評価の一体化

### 1. 研究開始当初の背景

日本では外国人が集住する地域においてその教育環境はいまだ十分整備されていないのが現状である。保護者の劣悪な労働環境による貧困、教育への理解や関心の低さは、ダブルリミテッド・バイリンガルや不就学の問題、学習機会の剥奪や貧困の再生産等、外国人児童の将来に重大な影響を及ぼすことも報告されている。日本語に触れる機会の少ない外国人児童にとって就学後の学習に困難をきたす学習言語の未習得は生涯にわたり不利益をもたらすこととなり、幼児期及び小学校期における外国人児童のための言語教育の指導法の確立は喫緊の課題である。

一方、移民や難民を多く受け入れている諸外国では、多文化状況における子どもに対する幼児期からの言語教育実践、及び話し言葉の指導から書き言葉の指導に移行する幼児教育から小学校教育への言語指導の円滑な接続についての知見が既に蓄積されており、Documentation や Learning Story 等、日常の保育の自然状況下における保育者の観察に基づいた評価が、多様な背景をもつ子どもの課題や育ちを適正に把握し、指導に活かす方法として活用されている。とくにドイツの幼児教育では、統制された状況で外部評価者が子どもを取り出して言語能力を検査する方法から、保育者が日常の様子を観察し、子どもの言語習得の状況を評価する方法へと転換したことにより、言語教育に大きな成果をもたらしている。今後、日本においても外国人児童が幼児期の生活言語習得から就学後の学習言語獲得までを円滑に行えるよう、幼児期における言語習得状況を適正に把握する方法、並びに幼児期及び幼小接続期における言語教育の実践と評価方法の開発は急務である。

### 2. 研究の目的

本研究では、日本に暮らす外国人児童とその家庭の実態を調査することを通して課題を明確にし、その支援のための具体的な方法として、日本語環境が乏しく言語習得に困難が生じやすい外国人児童に対し、保育者が日常生活の中で観察を通して幼児期の言語習得の状況を尺度と記述の両方で評価する指標を作成すること、及びこの評価を小学校以降の学習へと繋ぐことができるような、指導と評価を一体的におこなう幼児期の外国人児童の言語教育の方法を開発することを目的とした。

### 3. 研究の方法

まず、日本に暮らす外国人児童とその家庭の課題を明らかにするため、本研究の主たるフィールドである群馬県大泉町において、町が2019年に実施した子どもの生活・実態調査の結果から、日本人家庭と外国人家庭の比較をおこない、外国人家庭とその児童が抱える課題を明らかにした。調査対象は、大泉町に在住する小学1年生から中学3年生の児童・生徒の保護者3,083名、及び小学4年生から中学3年生までの児童・生徒2,080名である。回収は保護者1,886名、児童・生徒1,889名である(回収率:保護者61.2%,児童・生徒90.8%,有効回答数:保護者1,820名、児童・生徒1,887名)。保護者に関しては世帯全体の収入、児童・生徒に関しては、学業成績の自己評価、学習の理解度、及び生活に対する意欲・自信に関する項目をそれぞれ分析し、日本人家庭と外国人家庭の比較をおこなった。

また、外国人集住地域である群馬県大泉町と福井県越前市において、保育所に通う外国人児童の保護者を対象に、家庭内の言語環境、日本での子育てについて、園や行政に期待する支援について質問紙調査を実施した。対象は群馬県大泉町と福井県越前市の公立保育所等に通う外国人

児童の保護者（両親ともに外国籍，または両親のどちらか一方が外国籍）95名である。各園を通じて保護者にポルトガル語または日本語（漢字にルビを付したもの）の質問紙を配布し，無記名・任意での回答を求めた。その結果，51名からの回答が得られた（回収率53.7%）。大泉町については50名に配布し24名からの回答が得られ（回収率48.0%），越前市については45名に配布し27名からの回答が得られた（60.0%）。

次に，多文化共生に関して先進的な取り組みをおこなっている福井県越前市を訪問し，同市の支援について聴き取り調査を実施した。調査は2022年8月に実施し，越前市役所総務部市民協働課，ダイバーシティ推進室室長及び，福祉部こども家庭課，越前市と協定を結び地域の多文化共生推進に取り組む仁愛大学副学長，及び在籍児童の約40%が外国籍児という公立保育所において園長及びポルトガル語話者の保育補助への聴き取り調査をおこなった。

最後に，海外の幼児教育現場における言語教育実践の取り組みに関する調査結果を参考に，幼児期の言語習得状況を尺度と記述の両方で評価する指標を作成し，幼児期の教育から小学校教育への言語指導の円滑な接続に関する教育方法について検討をおこなった。現地調査をおこなったのは，ドイツ，ベルギー，ハワイ，ニュージーランドである。また，ドイツの幼児教育現場で用いられている言語習得状況を把握するための評価指標の日本語訳をおこない，それを元に日本語の習得状況を把握するための指標（試行版）を作成した。

#### 4. 研究成果

大泉町における子どもの生活・実態調査の結果から，保護者に関しては2018年の世帯全体の収入について日本人家庭と外国にルーツを持つ家庭を比較し，児童・生徒に関しては成績の自己評価，学習の理解度，及び生活に対する意欲・自信に関する項目を比較した。

その結果，外国人児童とその家庭の課題として以下の3つのことが明らかとなった。

- ① 世帯全体の収入では，日本人家庭と比較して低い収入区分の割合が高く，外国人家庭全体のうち33.2%が250万円未満であった。
- ② 日本人家庭の児童と比較して外国人児童は，学習上の困難さをより強く感じており，とくに中学生以上でその傾向が顕著であった。
- ③ 生活に対する意欲・自信に関する項目のうち，「自分には得意なことがない」，「誰かのために役に立ちたいと思う」の2項目において，外国人児童は日本人家庭の児童より自己評価が低かった。また，「自分のことが好きだ」については，外国人児童の方が自分のことを肯定的に評価しているものの，中学2年以降は評価が低くなっていた。

今後の課題として，保護者の経済状況が児童の学習状況や生活に対する意欲・自信に関する自己評価にどのように影響を及ぼすのか，それぞれの課題の関連性について検証するとともに，個別の事例を継続的に検証することにより，外国人児童の課題をより明確にし，具体的な支援策に繋げることの必要性が示された。

また，外国人の集住化が進む群馬県大泉町と福井県越前市の2つの地域において，保育所に通う保護者を対象に実施した質問紙調査では，同じ集住地域であっても，それぞれの地域の特徴が表れる結果となった。大泉町では多国籍化がみられる一方，越前市ではブラジル人がほとんどであり，この違いが調査結果の差にも表れている。両親の日本語状況では，大泉町，越前市ともに母親のほうが「少し困る」，「片言・話せない」と回答した割合が高く，日頃の子育てにおいて子どもと接する時間が長いであろう母親にとっては，保育者とのやりとりや行政サービスを受ける際にも通訳を介する必要性が高いことがうかがえる結果であった。また，大泉町の家庭では日本語環境が母語環境より優位にあり，越前市の家庭では母語環境が日本語環境より優位であ

ることが示唆された。ただし、回答数が少ないため統計的な分析をおこなうことができなかったため、より明確な結果を得るためには、今後多くのデータを収集する必要がある。

自由記述の回答からは、日本で子育てする外国人家庭の保護者は、とくに子どもの言語習得に対して不安を感じていることがわかった。各保育現場でポルトガル語話者の保育補助が配置されている越前市では、子どもに対する保育だけでなく、保護者との連絡や支援に関してもポルトガル語でおこなわれていることから、そのことが保護者の不安軽減になっていることもうかがえる。越前市の外国人の多くはブラジル国籍であることから、通訳や保育補助はポルトガル語話者のみの配置でよいが、多国籍化が進む大泉町においては多言語での支援が求められるため、対応がより困難である。今後は多言語での対応をどのように進めていくのかが大きな課題となる。

福井県越前市における多文化共生の取り組みに関する調査では、近年の外国人の永住・定住化の高まりから、外国人を一時的な滞在者ではなく地域住民であるという視点に立った支援をおこなっていることが明らかとなった。多文化共生を取り巻く課題や考え方を整理するとともに、日本人市民が外国人市民を同じ市民としてお互いを理解・尊重できるよう、市民・市民団体・企業・大学など各種団体と行政が協働している。とくに、同市と福井村田製作所、仁愛大学との連携・協働は、多文化共生実現に向けて大きな役割を果たしていることも明らかとなった。外国人労働者を多く雇用する福井村田製作所が、外国人支援のための寄附金や人材を市行政に提供することはもとより、仁愛大学におけるポルトガル語講座への寄付は多文化共生保育・教育を支える力となっている。

また、在籍児童の約 40%が外国籍という公立保育所では、ポルトガル語話者の保育補助員が各クラスに 1 名配置され、さらに保護者支援を目的とした通訳者が週 3 日勤務していることに大きな特徴がある。ポルトガル語を話すことのできる保育補助員は、多文化共生保育に対応し、言語コミュニケーションの問題を解決するための有効な手段としての通訳の役割のみならず、子どもの自国の文化を保障する役割としても重要である。この園では、資料や掲示物を全て日本語とポルトガル語の 2 か国語で掲示するほか、保育者が互いの文化を学び合い、協働する機会も設けている。保育者自らがこれまでの保育のあり方や自身の価値観を問い直し、試行錯誤を繰り返しながら、園児一人一人が自分らしく楽しく園生活を送ることができるよう援助し、多文化共生保育をおこなっていることが明らかとなった。

海外における調査では、ドイツ NRW 州の幼児教育施設における言語発達状況の評価を小学校に繋げるための取り組み、及びベルギーのフレネ学校における言語指導の幼小接続の課題と取り組みについて研究成果をまとめることができた。ドイツ NRW 州では移民的背景を持つ子どもの言語習得状況が大きな課題となっているが、その課題を解決する方法のひとつとして、新たな評価指標である BaSiK が開発された。これは、言語習得の状況を観察と記録に基づいて評価するための指標であり、ニーダーザクセン州や NRW 州を中心とした幼児教育施設で広く用いられている。NRW 州 Hilden 市ではすべての公立幼児教育施設でこの指標を用いた評価がおこなわれており、小学校入学時に学校教員らと共有されている。家庭における言語環境等に関する基本的項目、身体機能や社会情動的スキル等の発達を言語発達との関わりから評価する項目、及び言語理解やリテラシーに関する項目について、日常生活の中で日々子どもと関わる保育者が総合的かつ継続的に観察し、この観察に基づき、尺度による評価と記述による評価をおこなう。開発者である Zimmer らは 2,000 人以上の子どもを対象に調査をおこないこの評価指標を作成した。幼児期の言語習得状況の把握だけでなく、複言語環境にある児童のドイツ語習得に影響を与える言語的・非言語的要因も抽出することができる。そしてこの評価を用いて個別支援計画を作成し指導するという、評価と指導が一体的におこなわれている。

また、ベルギーでは、20世紀前半から、第一次世界大戦、第二次世界大戦後の国内の労働者不足を補うため、西欧・東欧諸国を中心に、モロッコ、トルコ、アルジェリア等から外国人労働者の受け入れをおこなってきた。1990年代以降は、外国人労働者の滞在合法化運動が盛んになり移民の出身国の多様化が進んだ。近年ではシリア等からの難民の受け入れもおこなわれ、さらに状況は変わってきている。こうした移民の増加と多様化に伴い、雇用や教育に関する移民政策が展開されるようになった。多様な文化的背景をもち、複言語環境下にある子ども達の言語能力の伸張を図る幼児教育や小学校教育は、ベルギーを始めとする多様化の進む欧米諸国では重要な教育課題である。特に、幼児教育と小学校教育の言語指導の差異は、話し言葉を主とする一次的ことばから書き言葉を含む二次的ことばへの移行に伴う困難が生じることが日本においても指摘されてきた。移民や貧困家庭等、社会経済的階層の低い子ども達はさらに不利な状況にあること、一方で質の高い保育を受けることが社会経済的階層の低い子ども達の小学校入学時点での成績に効果をもたらすことが明らかとなっている。こうした研究結果を踏まえ、ベルギーでも幼小の言語指導のカリキュラムや実践の開発と充実に力が注がれてきていることが明らかとなった。

本研究では、これまでの研究成果、及び海外における言語教育実践の取り組みを参考にしながら、言語習得状況を把握するための評価指標の日本語版を独自に作成した。この指標は、保育者が日常生活のなかで子どもと生活をともにしながら、子どもの言語習得状況を尺度と記述の両方を用いて評価をおこなうものである。評価項目は、子どもの家庭環境、言語環境のほか、基本スキルとして聴覚、口腔運動能力、触覚・運動感覚、心情・意欲・態度、社会性に関する項目、言語理解に関する項目、意味・語彙スキルに関する項目、音声・音韻スキルに関する項目、韻律スキルに関する項目、語彙・文構造の理解に関する項目、実践的スキルとしてコミュニケーション、対話、非言語的コミュニケーションに関する項目、そしてリテラシーに関する項目である。これらの項目について、一人一人の子どもの育ちを4件法で評価しつつ、日常生活での子どもの様子を記述することができる評価指標となっている。今後は、作成した評価指標が日本の保育現場で使用可能か、実際に保育者に評価を実施してもらい検討を重ねていく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|  |                      |
|--|----------------------|
| 1. 著者名<br>吉永 安里、岡本 拓子  | 4. 巻<br>11           |
| 2. 論文標題<br>幼児期の教育から小学校教育への言語指導の円滑な接続に関する一考察：ベルギー・フランダースのフレネ教育の実践から | 5. 発行年<br>2020年      |
| 3. 雑誌名<br>國學院大學人間開発学研究   | 6. 最初と最後の頁<br>57～77  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.57529/00001396                       | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                             | 国際共著<br>-            |
| 1. 著者名<br>佐々木由美子、岡本拓子  | 4. 巻<br>40           |
| 2. 論文標題<br>大泉町多文化保育研究会第6回シンポジウム報告                                  | 5. 発行年<br>2020年      |
| 3. 雑誌名<br>足利短期大学研究紀要   | 6. 最初と最後の頁<br>97-104 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                      | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                             | 国際共著<br>-            |
| 1. 著者名<br>佐々木由美子、岡本拓子  | 4. 巻<br>40           |
| 2. 論文標題<br>大泉町における親子教室の試み  | 5. 発行年<br>2020年      |
| 3. 雑誌名<br>足利短期大学研究紀要   | 6. 最初と最後の頁<br>37-44  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                      | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                             | 国際共著<br>-            |
| 1. 著者名<br>岡本 拓子  | 4. 巻<br>4            |
| 2. 論文標題<br>大泉町における学齢期の外国人児童に対する支援                                  | 5. 発行年<br>2021年      |
| 3. 雑誌名<br>子どもの日本語教育研究  | 6. 最初と最後の頁<br>4～14   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.57412/kodomonihongo.4.0_4            | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                             | 国際共著<br>-            |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>佐々木 由美子   | 4. 巻<br>4           |
| 2. 論文標題<br>外国人保育士のキャリア形成                                  | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>子どもの日本語教育研究                                     | 6. 最初と最後の頁<br>15～24 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.57412/kodomonihongo.4.0_15 | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                    | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>吉永安里                         | 4. 巻<br>44 (173)    |
| 2. 論文標題<br>言語教材のつながり                   | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>発達                           | 6. 最初と最後の頁<br>13-18 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>佐々木由美子                       | 4. 巻<br>11            |
| 2. 論文標題<br>日本で学ぶ外国にルーツをもつ子どもたち         | 5. 発行年<br>2023年       |
| 3. 雑誌名<br>子ども学                         | 6. 最初と最後の頁<br>133-150 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>佐々木由美子・岡本拓子・吉永安里             | 4. 巻<br>43-1        |
| 2. 論文標題<br>福井県越前市における多文化保育・教育への取り組み    | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>足利短期大学研究紀要                   | 6. 最初と最後の頁<br>25-34 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>佐々木由美子・岡本拓子・吉永安里             | 4. 巻<br>43          |
| 2. 論文標題<br>大泉町多文化保育・教育研究会第8回シンポジウム報告   | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>足利短期大学研究紀要                   | 6. 最初と最後の頁<br>89-94 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>野田敦史・町田大輔・岡本拓子                      | 4. 巻<br>21            |
| 2. 論文標題<br>大泉町「子どもの生活」実態調査報告：前回調査および家庭環境の比較から | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>高崎健康福祉大学紀要                          | 6. 最初と最後の頁<br>197-208 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難        | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>岡本拓子・佐々木由美子・吉永安里                       | 4. 巻<br>20          |
| 2. 論文標題<br>外国にルーツを持つ児童の課題 - 大泉町子どもの生活実態調査の結果から - | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>健康福祉研究                                 | 6. 最初と最後の頁<br>69-82 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                   | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難           | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Asato Yoshinaga, Yumiko Sasaki, Hiroko Okamoto   |
| 2. 発表標題<br>Implementation of children's agency and participation in multicultural early childhood education: ECE practices focus on language acquisition and transition to primary education in Echizen, Fukui, Japan |
| 3. 学会等名<br>EECERA 31th Conference, Estoril (国際学会)   |
| 4. 発表年<br>2023年   |

〔図書〕 計2件

|                                 |                 |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>吉永 安里                 | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>風間書房                  | 5. 総ページ数<br>238 |
| 3. 書名<br>幼児教育と小学校教育における言葉の指導の接続 |                 |

|                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>佐々木 由美子   | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>明石書店      | 5. 総ページ数<br>208 |
| 3. 書名<br>多文化共生保育の挑戦 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                        | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)               | 備考 |
|-------|--|-------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 吉永 安里<br><br>(Yoshinaga Asato)<br><br>(50714721) | 國學院大學・人間開発学部・准教授<br><br><br>(32614) |    |
| 研究分担者 | 佐々木 由美子<br><br>(Sasaki Yumiko)<br><br>(80742874) | 足利短期大学・その他部局等・教授<br><br><br>(42205) |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

|         |         |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|